

書評

パーソン・センタード・ケアでひらく
認知症看護の扉

- 編集 鈴木みずえ／酒井郁子
- 定価 本体 3800 円＋税
- 発行 南江堂

評者

金沢大学附属病院
副病院長・看護部長
小藤幹恵

これからの認知症看護の
重要な方向を示す 1 冊“認知症と共に生きる人”
という捉え方

高齢による認知機能低下をはじめとする身体諸機能の衰えは、日本の長寿社会の中で受け入れられつつあり、今求められているのは、そのことも含めて成り立つ社会につながる一步一步の取り組みである。特に、本書の中での“認知症と共に生きる人”という表現は、人への一面的な見方ではない、広がりのある捉え方を促してくれる。

本書は、人や人生の幸福を基本に据えた深い想いを以て、読み手の理解を進めてくれる。重要な事項を分かりやすく整理し、詳しい説明へといざなってくれ、「そういえば」と思い当たるような身近に本当に考えさせられる事例を用いて紐解いていく。そして、その人の体験している世界がしみじみとわかり、「嗚呼、そうだったのか」と思いを馳せることができたとき、それをいつの日にか自分自身にもありうることと感じ、少しでも助けになりたいという気持ちが湧きあがるのだろう。

さらに、本書には人や人生についての考え方、大切な場面での具体的な関わり方を深める内容が込められている。患者と看護師の関係にとどまらず、看護を継続するチーム、医療を行うチームにも、関わり方における重要な方向を示す、輝くメッセージを感じた。

今できることを丁寧に
根気よく行っていくこと

筆者は高度急性期医療の場に長年身を置いていた経験から、本書を読み進めながら、身体拘束は一時的だからよいというわけではないことを一層強く感じるとともに、人を大切に思うこと、看護の観察や洞察は「苦痛や不安、危険を察知して取り除く」重要なステップであり、そ

れが豊かなケア実施の原動力になること、そしてこの看護という仕事の重要性を改めて感じた。

認知症と共に生きる人を理解すること、前向きに知ろうとすること、まずは今ここでできることを小さな子どもを育てていくプロセスのように丁寧に根気よく、ささやかな喜びを見だしながら行っていくことこそが、穏やかな笑顔や症状の進行を緩やかにすることにつながると思えた。

本書の随所で、心に響く言葉と出合った。例えば人格について「失われるのではなく病気の症状によって隠されていく」(p.150)、認知症当事者であるブライデン氏の「認知症という烙印は、社会的孤立を意味します」から始まる言葉(p.230)、英国アウトカム指標の9項目の「(一例)私には、周囲の人々に尊重してもらいたい余生の在り方があり、それが叶えられると感じている」(p.241)に目を開かれ、心の扉が開く思いがした。また、看護に携わる人に必要な最新の知識についても記載されている。迷わず抱え込まずつながりながら、認知症と共に生きる人にとっての最善を求めることへの示唆に富んでいる。関わる1人ひとりが、本人とその近くにいる方々にできることをするために、そしてつながることにより良いものにしていくために。

「子ども叱るな、自分も来た道。年寄笑うな、自分も行くだ」——昔、あるお寺の前の貼り紙に書かれていた言葉である。人はときには、これまでとこれからに想いを向けることで優しい気持ちになれると思う。

本書では、認知機能と人の歩みについて、人同士ならではの関係性の中にある価値を掘り下げながら、具体的な在り方への貴重な提案が示されている。読み進めるうちに、本書のタイトルに込められた意味の深さに気づくことができた。